



(a) では第2・4句に字余り、初句・結句に字足らずが起こっており、短歌の定型から大きく外れている。もちろん多少の字余り・字足らずはリズム上問題なければ許容されるが、規定の音数に収まっているのは第3句のみであるうえ、結句のように2音以上のずれも見られる。短歌指導においては、(a) で例示したような定型からのずれに直面してきた。このような形式に対しては、「まず声に出してみよう、声に出してみるとおかしいことがわかる」というように指導しがちだが、5・7・5・7・7のリズムに馴染んでいない者からすれば(a)にもそれなりのリズムはあり、実はおかしいことに気づけない。「声に出せばわかるだろう」というのは短歌のリズムに馴染んだ側の発想にすぎず、学生にも通用するとは限らないのである。さらに我々は、形式的に定型を守っていても、その表現・語彙から感覚的に「歌になっていない」と判断することも多い。端的には交通標語と短歌の差、といった問題になるわけだが、これもどこがどう違うのか、どうすればよいのかを指導せよとなると、どこから手をつければいいのかは難しい。

歌から遠ざかった現代人が短歌を作ることを求められた際、足りていないものを極言すればそれは「型」ということに尽くされると思われる。まず、音数律としての「型」に馴染みがないということに加え、表現としての「型」についての経験も不足している。

このような現状に鑑み、今後の短歌教育を考えるならば、本格的な作法や歴史といった専門以前に、前提ゼロの状態、なんとなく歌というものの「型」がわかるための、教育上の橋渡しが必要とされるのではないか。例えばかつては、百人一首かるたでの遊びが、定型や上の句と下の句のつながりといった「型」を身に付けるために機能していたはずである。

さて、ここでは「歌」という語を、短歌を指すものとして用いたが、より一般的な意味における「歌」、いわゆる歌謡曲や童謡といった現代楽曲には、学生にとっても馴染み深い存在である。そして、短歌とこれら現代の歌は、ともに「歌」と呼ばれるだけあって完全に別個のものではなく、現代の歌にも特有のリズムや表現が存在する。短歌学習においては、音数律・表現という2つのレベルでの「型」への習熟が求められるが、短歌に限らない現代の歌においても、この2つの型は存在する。今では一昔前と言わざるをえないが、いわゆる七五調の楽曲は歌謡曲の定型であったし、現代の歌謡曲の歌詞においても、「瞳を閉じて」「手を伸ばして」「あの空へ」などといった“ありがちなフレーズ”は経験的に蓄積されている。そしてこちらについては学生にも理解できる。ならば、一足飛びに古典としての短歌に触れずとも、現代歌謡の型を利用して、現代語・現代の「歌」から短歌に馴染むという方法がありうるはずである。感覚として理解するよりない(短歌)指導において、すでに持っている、それに類似する感覚(現代の歌)を橋渡しにする方法が有効ではないか。そこで、短歌を学ぶ下ごしらえの教育方法の可能性として、実際の短歌を経由せず、現代歌謡から定型を学ぶ方法を考案した。現代の歌の歌詞から5音・7音の箇所を探し出し、それらを「5・7・5・7・7」の順番に並べ合わせて現代語短歌を創作する、というのが概要であり、歌詞を組み合わせる短歌の形を作る過程を機械がランダムに行うことで、ゲーム性を持たせている。

本稿では、ゲームを通して型に触れるためのツールとして、歌の歌詞データを素材に、短歌をランダム生成するシステムを提案する。Excelを利用したシステム構築方法を中心に紹介し、補足的に現時点での効果や、試験運用で見えてきたことを報告する。

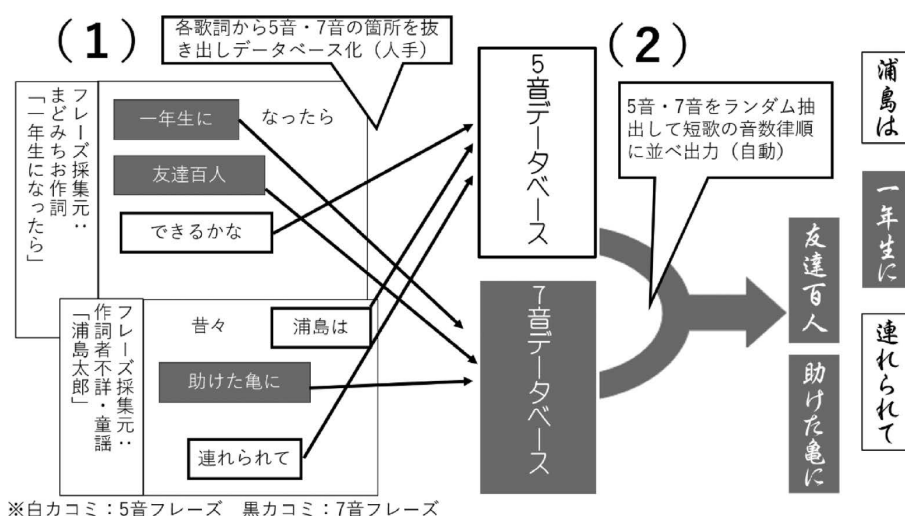
第2節では歌詞の自動短歌化システムの概要を述べ、第3節ではExcelを利用した実際の作成方法(3.1)および、使用方法(3.2)を説明する。ここまでの本稿の中心となるが、第4節以降、本シス

テムを実際に教育利用した事例報告として、機械の出力結果から何を考えさせるか (4. 2)、また、機械を利用しない実施形式とその効果 (4. 3) について補足する。さらに本システムのデータを学生に作成させた際に気づいた事実について報告する (第5節)。

## 2. 現代歌謡にみられる「型」と、歌詞の自動短歌化

まず、本稿で紹介する自動短歌生成システムの概要を述べる。

本システムは、(1) 任意の歌の歌詞から5音・7音のフレーズを収集し、データとして蓄積 (2) 蓄積されたフレーズをランダム抽出し、5・7・5・7・7に並べる、という2段階からなる。



※白カコミ: 5音フレーズ 黒カコミ: 7音フレーズ

図1 歌の歌詞を素材として短歌を生成するシステムのイメージ

このような形で歌詞から抽出した5音・7音のフレーズを組み合わせると、形式面では短歌が生成できる。以下 (b)~(d) は予備実験として、宇多田ヒカル作詞「花束を君に」と康珍化作詞「タッチ」の歌詞をもとに、ランダムに結合した結果である。

- (b) ふれあうの2人で肩を両手でも星屑ロンリネス大切に
- (c) 抱きしめて君の笑顔がまわり道ため息の花まぶしい風景
- (d) 並べても伝わらなくても人知れぬ抱えきれない落ちた涙も

一般に、文章を自動生成しようとする時、往々にして語と語の接続に不自然さが生じることがあるが、短歌として解釈することを前提にすれば、許容度は上がる。(b)~(d) の3例については、これを散文内の完結した一文とみるならば、(b) は中止形の言いさし、(c) は述語が前置されたうえで体言止め、(d) は名詞項が提示されたまま終わるといった構造であり、いずれも自然な文とは言い難い構造であるが、短歌としてならば、一つのまとまった表現として許容できる。

## 3. Excel を利用した簡易自動生成シートの製作法

本節では、Excel のみで作成できる、簡易的な短歌自動生成シートの、実際の制作方法を紹介する。概要をあらかじめ述べると、5音、7音のフレーズを Excel シートに蓄積し (3. 1 ①~⑥)、5音のフ

フレーズを2つ、7音のフレーズを3つランダムに取り出し、別シートに5・7・5・7・7の順番で表示する(3.1 ⑦), というだけである。必要なスキルは、ランダムにナンバリングができること (RAND関数など)、降順・昇順の並べ替えができること (「並べ替えとフィルター」より、並べ替え)、別シートのセルを表示できること (「=(シート名)!(セル名)」など) のみである。以下、具体的な手順例を示す。

### 3.1 自動生成シートの作成法

- ①「歌詞」の列を作り、ここに短歌生成の素材となる現代歌謡曲の歌詞の、5音のフレーズを記入していく。
  - ②その隣にナンバリングのための列を設け、RAND関数を利用し、各歌詞に乱数を付与する。実際の作業としては、歌詞の隣のセルに「=RAND ()」と入力する。
  - ③3行目以降もコピー。これにより、各歌詞にランダムで乱数が付与される。
  - ④1行目にフィルターをかける。
- (以上、図2参照)
- ⑤新たに7音の歌詞リストを作成するため、シートを切り替える。
  - ⑥7音のデータについても①～④同様の工程で作成する。

これで sheet 1, sheet 2 それぞれにナンバリング付きの歌詞データが格納されたことになる。この後、結果表示用に、新たに sheet 3 を設け、5音は sheet 1 から、7音は sheet 2 から抜き出し、それらが5・7・5・7・7の並び順になるよう sheet 3 に表示する。

- ⑦ sheet 3 で「=(参照するシート名)!(参照するセル名)」と入力する。例えば「=sheet 1! A2」であれば、ここに sheet 1 の A2 に入力されている文字列が表示される。

(以上、図3参照)

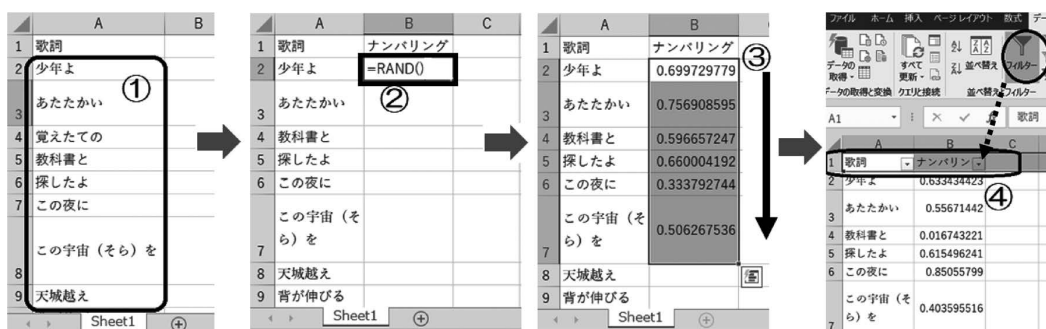


図2 短歌自動生成シート作成作業イメージ (1)

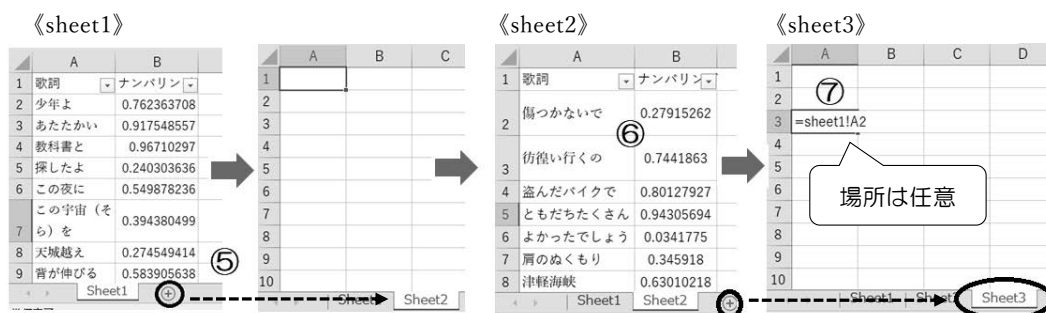


図3 短歌自動生成シート作成作業イメージ (2)

sheet 3において、短歌形式として表示するには、例えば以下のような並びにする。

5音：sheet 1    7音：sheet 2    5音：sheet 1    7音：sheet 2    7音：sheet 2

=sheet 1 ! A2	=sheet 2 ! A2	=sheet 1 ! A3	=sheet 2 ! A3	=sheet 2 ! A4
---------------	---------------	---------------	---------------	---------------

なお、ここでの参照シート「sheet 1」「sheet 2」は本形式でデータを作成した場合は固定だが、参照セル「A2」「A3」などは、任意のセル番号でよい。

上記作業により、sheet 3内で表示したい位置に、sheet 1・sheet 2に格納されているフレーズを5・7・5・7・7の組み合わせにして表示することができる(図4)。このあと、sheet 1, sheet 2側の「A2」「A3」などに表示される歌詞がランダムに切り替わるので、それに合わせて出力される結果も切り替わる。

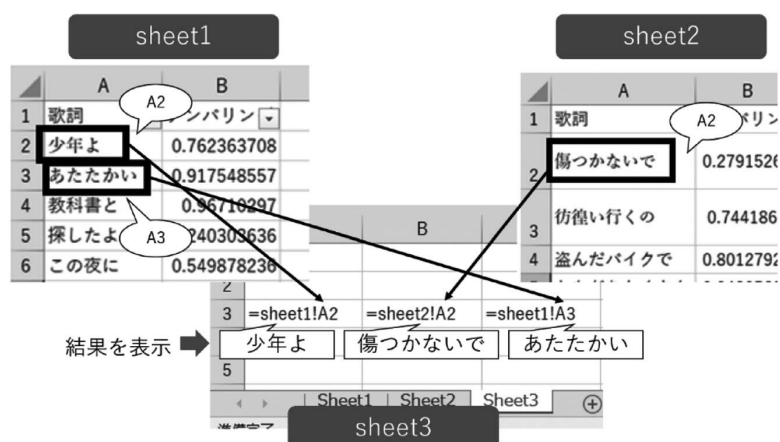


図4 データ格納用の sheet 1, sheet 2 と表示用の sheet 3 の関係 (1)

### 3. 2 自動生成シートの使用法

3. 1で作成した結果表示用の sheet 3は、sheet 1・sheet 2それぞれの中から、指定したセルを表示するものであった。図4であれば、結果表示の初句は「sheet 1のA2」という指示であるため、「少年よ」が表示される。この指示はあくまで「A2のセルの文字列を表示する」ということなので、A2に表示される文字列がランダムに切り替われば、生成される短歌も変わることになる。その手順を、sheet 1を例に示す(図5)。

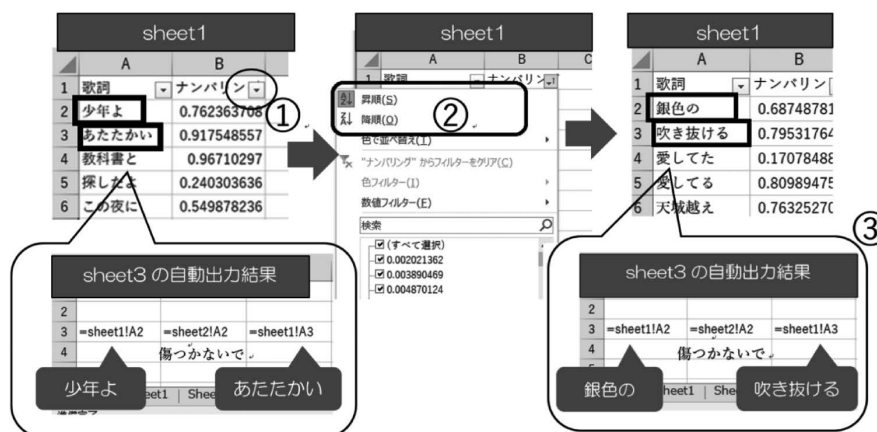


図5 sheet 1の並び替えと、sheet 3の出力結果



- ①まず「ナンバリング」列のフィルターをクリックする。
- ②ウィンドウが開くので、「降順」あるいは「昇順」を選択しする。どちらでもよい。
- ③その結果乱数が降り直されるため、ランダムに並べ替えが起こり sheet 3 に表示される結果が切り替わる。

以上をまとめると、この自動生成シートを用いて短歌を出力する操作方法は、以下の通りとなる。

- (1) sheet 1 の「ナンバリング」列のフィルターから「降順」もしくは「昇順」で並べ替える。
- (2) sheet 2 の「ナンバリング」列のフィルターから「降順」もしくは「昇順」で並べ替える。
- (3) sheet 3 をあけ、結果を確認する。

構造自体は非常に単純であるため、構造さえ理解すれば sheet 3 を複数表示するなどのカスタマイズも可能である。図 6 は sheet 3 に出力結果を複数表示するカスタマイズ例である。sheet 1 には 5 音フレーズ、sheet 2 には 7 音フレーズが格納されているため、参照するシート指定は常に「5・7・5・7・7」の順に合わせて「sheet 1・sheet 2・sheet 1・sheet 2・sheet 2」となる。一方で、「A2」「A3」などの各シート内の参照セルは、その値である必然性はなく、そのシートにフレーズが記入されているセルであれば、「A4」でも「A5」でも構わない。そこで、参照セルの値を替えながら、複数設定することで、一度に複数の短歌を自動生成することもできる。

	A	B	C	D	E	F
1			参照するシート指定は同じ			
2						
3	1 首め	=sheet1!A2	=sheet2!A2	=sheet1!A3	=sheet2!A3	=sheet2!A4
4						
5						
6	2 首め	=sheet1!A4	=sheet2!A5	=sheet1!A5	=sheet2!A6	=sheet2!A7
7						
8			参照するセルを変更			

図 6 短歌複数表示のためのカスタマイズ例

#### 4. 教育利用の可能性

本稿で紹介しているシステムは、歌謡曲の歌詞を素材として短歌を自動生成するものである。本稿の主眼はこれまでに紹介したその構造・作成法が中心であるが、5音、7音のリズム・表現双方のまとまりに慣れ、歌全体としてのつながりを考える、という面で教育効果が期待できるのではないかと考えている。本節では、本システムを用いた遊びを通しての教育利用の方向性を、部分的なものではあるが試験運用の結果も交えつつ報告する。

##### 4. 1 自動生成結果の目的に合わせた、元データ (sheet 1, sheet 2) の選定・調整

本稿で紹介した自動生成シートは、簡単な操作で見覚えのあるようなフレーズが短歌にまとまる、という遊びとして使用されることを想定している。遊びであることを重視するならば、手軽さのみな

らず、面白さが求められる。短歌らしい形が自動生成されると同時に、それなりに変なものも生成できた方が、遊びとしては盛り上がる。本システムを試作するにあたっては、5音、7音のデータとともに300行、図2の①に示した「歌詞」列に、5音、7音それぞれ300行入力した。データ量としては百人一首を一つの目安とし、計算上百人一首全体で、7音のフレーズが300、5音のフレーズが200となることから、多い方の300を採った。300フレーズから成る試作データからランダムに5首を自動生成すると、順に以下の(e)~(i)が得られた。

- (e) 走り出す 一年生に 歌うため 生きる喜び からだうらはら
- (f) 探してよ 過ぎた頃から 一人きり 戻れなくても 人恋しくて
- (g) 不幸せ 友達たくさん 教科書と あなたがいなきゃ 電話もできない
- (h) 午前二時 富士山の上で 外ばかり やさしい君は 君を描くよ
- (i) ドラえもん 盗んだバイクで 誰よりも 傷つかないで 彷徨い行くの

出力結果は、当然ながらどのような歌詞を集積したかが影響する。本稿では「現代の歌」を緩やかに「歌謡曲」と称してきたが、格納すべき歌詞は、狭義の歌謡曲に限る必要はない。一定量「変なもの」を生成するためには、童謡や演歌など、別ジャンルのものをあえてデータとして選定したり、「盗んだバイクで」などの破壊的フレーズを複数入れたりしておく、などの調整をするとよい。機械側がランダム抽出するため、これがあたると面白い、というようなフレーズは、本来1曲内に一度しか登場しなくても、重複して入力しておくことで出現確立を上げ、ゲームバランスを調整できる。また、面白さとは別の方向性として、あえて特定のジャンルや歌手のみでデータを構築し、そのジャンル特有の雰囲気や表現を短歌形式に要約し、それらを比較して特徴抽出を試みる、といった方向性もありえよう。

#### 4.2 自動生成の先に一人として考える

本システムの基本理念は「自動で短歌っぽい何かを生成するおもちゃを作って短歌に慣れよう」というものであるが、実際に短歌の感覚を身に付けていくためには、根本的には「人の心」は不可欠である。そもそもゲームにおいても、自らの意志が介在しない偶然によると、自身の意志・選択する部分のバランスが、その遊びを支えているはずである。そこで、自動生成された短歌をもとに、位置の移動を考えるという作業を取り入れ、機械による偶然と、意志による思考・検討を繋ぎ、「歌を考えてつくる」という過程へつなぐことができるのではないかと考えている。

例えば前掲(h)は、面白いわけでもなく歌らしいわけでもない、出力結果としては失敗作と言えそうな短歌だが、それゆえに、この出力結果を出発点に「どう直したらよいか」という問いが立ちうる。せめて下の句の7・7を逆にしたらどう印象が変わるか(h')、さらに上の句の7音部分も含め入れ替えるとどうなるか(h'')、といった調整を試み、より変になるか、あるいは収まりがよくなるかを考える、というような展開がありうる。

- (h) 午前二時 富士山の上で 外ばかり やさしい君は 君を描くよ
- (h') 午前二時 富士山の上で 外ばかり 君を描くよ やさしい君は
- (h'') 午前二時 君を描くよ 外ばかり 富士山の上で やさしい君は

短歌のリズムとしての「5・7・5・7・7」は外形的な型の問題であり、その型に合致しているか否かは客観的に判断がつく。まずはより親しみやすいフレーズでその型に馴染み、指折り数えずとも判別がつくようになる、というのが第一歩だと考えるが、音数さえ整っていればよいわけではなく、その先、鑑賞や創作といった内容面への理解も深めていく必要がある。しかし既成のきちんとした評を読んで理解できる段階にない場合も現実的には多く、その状態で正解の鑑賞を正解として覚えたとしても実感が伴わない。また、自身が創作したものを自分で直す、あるいは人に直されるという場合、自作ゆえの思い入れが邪魔をすることもある。そこでこのような形で自動生成された、何の思い入れもない5・7・5・7・7を、並べ替えて検討することにより、単に外形的リズムに馴染むことにとどまらず、内容面に踏み込んでいく橋渡しにもなる可能性が拓けよう。

#### 4. 3 機械による自動生成に頼らない実施方法～実験イベント「令和歌合」

本稿では、歌謡曲の歌詞をもとにした短歌の自動生成システムを紹介し、遊びを通じた短歌教育の可能性を論じてきた。本稿の中心は自動生成システムの製法であったが、この遊び方においては機械による自動化は必須ではなく、機械に頼らず、紙ベースで実施する方法もありうる。ここからは、本システムの理念を援用しつつ、機械を使わない形で実施した実験イベントについて報告する。これは機械が扱えない場合の代替手段にとどまらず、機械を使わないからこそその効果も見通せるものである。大人数で遊ぶ機会があるのであれば、むしろ紙ベースのほうが効果的である。短歌生成の方式自体は本稿で紹介したシステムのまま、あえて機械に頼らずに実施する実験として、昭和女子大学での学園祭<sup>2</sup>にて「令和歌合」という実験イベントを開催した。紙媒体で準備するものは歌詞データの印刷された「短歌作成用パーツ」と「貼付用短冊」である（図7）。

印刷した短歌作成用パーツはフレーズごとに切り取り、山札のように置き場を作って入れておく。ここまでが主催者側の準備である。参加者は、「5音の山」「7音の山」からフレーズを選んで組み合わせ、貼付用短冊に選んだフレーズを貼って短歌を完成させる（図8）。

なお参加者が短歌の定型に馴染んでいない場合を想定し、貼付用短冊については、図7に示したように、5音・7音の貼付位置に合わせてガイドを作っておくとよい。自由に作業させると「5・7・5・7・7」にならないものを貼り付ける可能性が存在するためである。また、5音・7音の短歌作成用パー

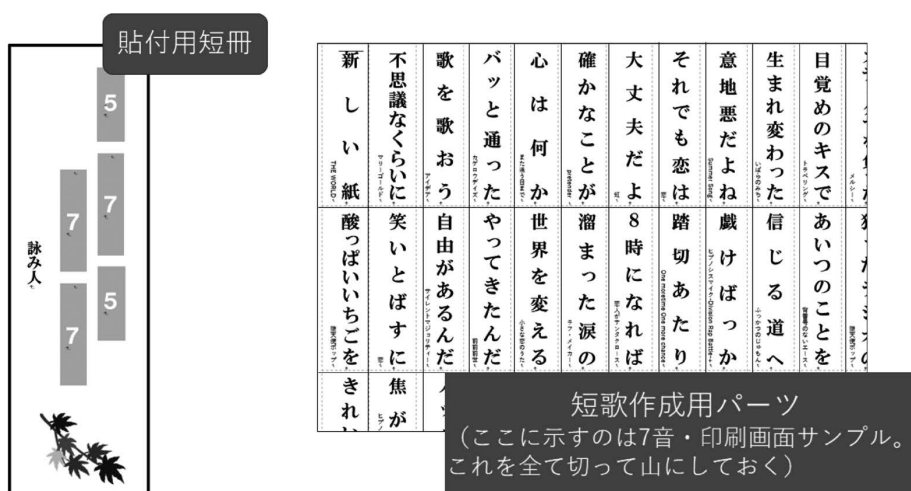


図7 「令和歌合」紙媒体フォーマット



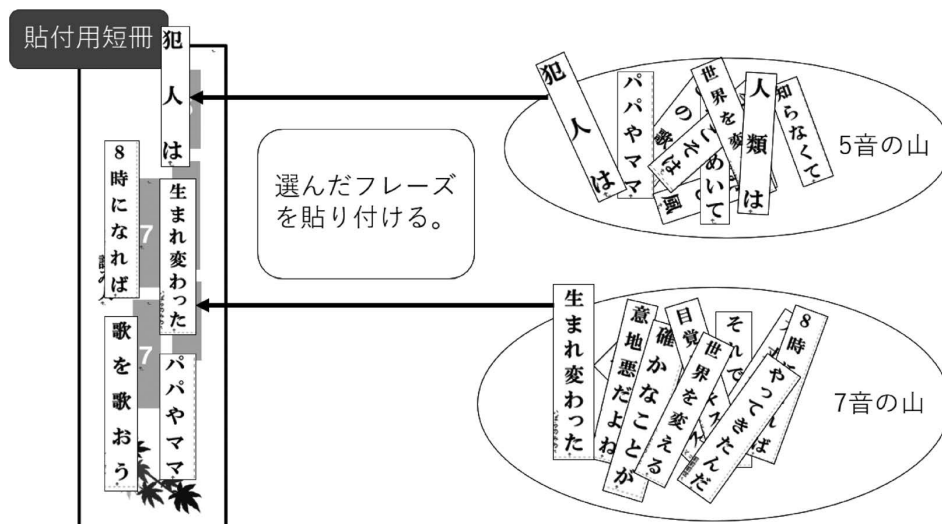


図8 「令和歌合」参加者の動き

ツ側の紙も、規格を合わせたうえで、5音の紙の長さとして7音の紙の長さを別にしておくと、5音の位置に7音を貼り付けるなどのエラーも防ぐことができるため、単に白紙に貼り付けさせるよりも規格を整えた貼付用短冊を用意しておく方が有効である。

この形式での遊び方は、内容面では自動生成システムと大差なく、機械がランダム出力する代わりに自力で紙を貼る、というのみの変更だが、機械が介在していた部分を人が代わることによって、手軽さを失うことと引き換えに遊び・教育としての自由度が増す。5音・7音のパーツの選び方は、目を閉じて引くというランダムなものでもよいし、自分で選ぶのもよい。また、並べ方においても、物理的に紙の上に置いていくので、貼るまえに並べ替えて検討することもでき、複数人で参加している場合はそこに会話も生まれる。隣に人がいれば、意見・感想を言い合うし、先に作った誰かの作品が貼ってあればそれが自分の創作のモチベーションにつながる。自動生成シートの sheet 1, sheet 2 の歌詞データがあれば、紙媒体での実施も可能であるため、状況や目的に応じて、紙媒体での実施も選択肢として考慮しておくとうまいだろう。

## 5. おわりに一追加報告：「型」から遠ざかったことの検証

本稿では、現代の歌の歌詞をもとに、短歌を自動生成する方法を紹介し、短歌から遠ざかった時代における、短歌教育の可能性について検討した。実は本システムは、プロジェクト科目の流れをくむ学生との同人活動<sup>3</sup>の中から生まれたものであり、試作した歌詞データの収集・入力作業は学生によるものである。本稿のむすびに代えて、学生の作業から見てきた、現代の学生のリズム認識について報告したい。

学生が入力した歌詞データのチェック作業をしていると、規定の音数から外れるフレーズが混入している場合が目につき、それが作業前に筆者の想像を上回る頻度を感じられた。作業学生は大学1年から4年にわたる8名、全員日本語ネイティブのうえ、有志として活動に参加する程度には、古典への知識・関心がある学生である。

歌詞採集時点で、学生から字余りはどうするか、という質問はあった。作業としての正確さ・均質性を取るなら、機械的に5音、7音のみに縛って字余りは入力しない、という方法がわかりやすいが、

実際の短歌でも字余りは起こる。また、リズムに親しむという観点からも、字余りも許容した方がよいと判断し、そのため字余りも許容することとした。指示内容は極めて緩やかなもので、特殊音節の数え方や、何音分の過不足までを許容するか等については一切指示せず、「リズム的に収まるなら」というだけの指示にとどめた。担当教員の立場としては、リズムに収まるかを考えながら感覚に馴染んでほしいという思いと、これだけの指示でどの程度の精度の結果が得られるのかを確かめたいという興味などが入り混じった曖昧な指示と言わざるを得ないが、その結果は第1節で指摘した、「声に出せばわかるだろう」は通用しないことを立証することになったととらえている。

さて、ここであらためて「字余り」について確認するが、筆者が計測したところ、そもそもかつての短歌教材の代表、百人一首でもちょうど3分の1、33首が字余りを含んでおり、字余り自体はそれほど珍しいことではない(表1)。大部分は5・7・5・7・7のうちのいずれか1か所、百人一首100首において、5音が1首あたり2か所×100=200か所、7音が1首あたり3か所×100=300か所ある計算になるが、それぞれの字余り出現率を計算すると、表1の通り、5音、7音で大差なくともに7%程度である。

表1 百人一首の字余り出現率

	字余り	総数	出現率
5音	14	200	7.0%
7音	20	300	6.7%

学生が作成したデータは、チェック前のエラーを含む状態で5音のフレーズが2,147、7音のフレーズが2,356にのぼるが、両者ともにそのうち300フレーズに対し、サンプリング調査を行った。規定音数以外のフレーズ出現率は表2の通りであり、7音を求められたフレーズで7音でないものは3割に達する。そもそも七五調から外れた現代の歌詞からフレーズを切り取ってくることによる影響も考えられるが、字数の多い7音で、よりエラーが起こりやすいという結果となっている。これは純粋に音数が増えればそれだけ数えにくくなる、ということを反映していると考えるのが最も自然であり、作業において、ただ数を数えて判別感覚にリズムが機能していないと解釈できそうである。ここで学生データのエラーに関して、「字余り」とせず「規定音数以外のフレーズ」と称したのは、百人一首内には見られない字足らずが5音、7音ともに見られたからである。しかも7音に至っては、総数300のうち20例ほども字足らずが確認できる状況である。特定の作業学生にエラーが集中しているわけでもなく、一般的な傾向と受け止めざるを得ない。また、7音の場合は1音にとどまらず、2音の字余りまでもが観察された。本稿で紹介したシステムの試作を通じ、図らずも現代の学生が、短歌

表2 学生採集データの規定音数外フレーズ出現率

	規定文字数以外			総数	出現率
	1音過剰	2音過剰	字足らず		
5音	26			300	8.7%
	24	0	2		
	1音過剰	2音過剰	字足らず		
7音	92			300	30.1%
	66	6	20		
	1音過剰	2音過剰	字足らず		

のリズムから遠ざかっていることを検証することになったといえよう。

表2において特に注目すべきは5音の字余りと7音の字足らずである。これらは音数上はともに6音で共通である。そして実際の短歌一般においては、たとえば表1の百人一首において14例ある6音の句がすべて5音の字余りに位置しているとおおり、6音はリズムとしては5音の側で認識されている。しかし表2からは、6音のフレーズを5音扱いするか、7音扱いするかは24対20とほぼ同数であり、リズムの感覚がなく、「5音と7音の間」としてしか認識されていないことがわかる。

表3に、規定文字を外れたフレーズの実例を示す。7音の字足らずは、一般的には5音の字余りに入るようなものであると感覚的には判断できよう。5音と7音のリズム感の差が明確でなく、4音から9音までの間を、なんとなく5音と7音に振り分けている、というのが実情であろう。また、字余り(6音)の「震えている」「覚えたての」や字余り(9音)の「熱い缶コーヒー」、字余り(8音)の「偉くなれたなら」は、字数のうえでは5文字あるいは7文字ちょうどに収まっている。「字余り」と称される現象は、文字数の問題ではなく、実態上は音の数なのだが、その名にひきずられて文字数を数えている可能性も考えられる。だとすれば、そこには言葉として発音してリズムをとる、という過程を介在させず、音と文字を混同して視覚的に文字数を「1, 2, 3…」と数えていることが失敗の一類型となる。極端な音数の過不足でない、一般的な字余り、すなわち6音、8音のフレーズにおいても、子細に検討するとそれぞれおさまりがよく許容できそうなものと、許容しにくいものがありそうである。ここからはあらためて、我々がどのようなものとしてリズムを認識しているかという課題も開けよう。これらの事例から、歌そのもののリズム、また、「歌を詠む」ことから遠ざかった世代のリズム感覚をより明確に把握し、現代の学生と短歌の距離を縮めていきたい。歌詞から5音、7音を取り出す作業を、学生が難なくこなせる日が来ることを願いつつ稿を閉じる。

表3 学生採集データの規定文字数外フレーズの主な例

5音	字足らず(4音)	あるくの、冬の日
	字余り(6音)	震えている、覚えたての、暗い夜の、ずっと夢に、たったひとつ
7音	字足らず(6音)	冷えた体、逃げ場もない、駆け出す人、期限がある、どんなときも、ボクはキミを、そばにいれば、独りで待つ、さよならして、ドーナツ盤、目をつぶれば、君が見える、今会えない、分かるでしょう、君は来ない、ひとりきりの、街角には
	字余り(8音)	くものすくぐって、煙草をふかして、離れ難いのさ、なんて意味のない、偉くなれたなら、どんな夢見てる
	字余り(9音)	シロップを落として、カップの底見つめ、ハートは万華鏡、縛られたくないと、熱い缶コーヒー

#### 注

- 1 本学の1年次から3年次まで、全員参加の宿泊研修を必修としている。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2022年現在は日帰り実施となっているが、コロナ流行以前は3泊4日にわたり、都内のキャンパスを離れ、自然豊かな宿泊施設の中で各学科が特性を生かしたプログラムを実施してきた。日本語日本文学科のみ、この学寮研修期間中に、自然散策を通して歌材を収集し、歌に詠むという伝統を残している。
- 2 2019年11月9日・10日「第27回・昭和女子大学秋桜祭」に団体名「全コ連」で参加した。附属校の生徒や一般客も来場し、ブースで作成された短歌は100首を超えた。
- 3 筆者は、日本語日本文学科コースプロジェクト科目「古典教材開発プロジェクト」を2016年から2018年に

かけて担当し、参加学生と機械処理・統計を利用した単語帳の作成等を行った。プロジェクト終了後、学生有志が活動の継続を希望し、現在は「全コ連」（「全日本古文愚連隊」が由来らしいがこれが正式名称である）という団体名で、学園祭に参加し、牛車のペーパークラフトを公開するなど、細々と活動している。本稿で紹介したシステムは、2019年の秋桜祭に向けた企画として出されたアイデアが出発点となっている。

**【関連資料】**

昭和女子大学全コ連（2019）「短歌の「型」に関する実験—現代の歌を短歌化してみよう—」昭和女子大学秋桜祭ポスター展示，2019年11月9日

（すなが てつや 日本語日本文学科准教授・近代文化研究所所員研究員）